

活動報告

「学生が変わる日本大学」第2章 —「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」における取り組み—

瀬戸山自然*^{1), 2)}, 田仲義典^{1), 3)}, 安田結城^{1), 4)}, 馬渡惟史^{1), 5)}

¹⁾「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」学生スタッフ, ²⁾日本大学通信教育部経済学部経済学科4年,
³⁾日本大学経済学部経済学科4年, ⁴⁾日本大学文理学部哲学科平成27年3月卒業, ⁵⁾日本大学医学部医学科2年

本稿は、日本大学における「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」の全容と開催後のアンケート結果から、今後の課題と展望を述べたものである。

「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」は一般的な学生FDイベントと違い、様々な学部から成り立っている日本最大規模の総合大学だからこそできる“日本大学独自の学生FDサミット”と言える。平成26年2月26日に開催された第1回目となる「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」の経験を経て進化した第2回目である「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」について、学生スタッフのそれぞれの視点からの意見と、参加者からのアンケート結果を分析し、今後の課題と展望を明らかにしてある。今後の日本大学における学生FDの更なる発展の糧となることを期待する。

キーワード：FD (Faculty Development), 学生FD, 「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」

1 はじめに

日本大学（以下、「本学」とする）は、平成20年に日本大学FD推進センター（以下、「本センター」とする）を開設し、「自主創造」の教育理念・目的の下、教職協働・学生参画を意識し、ファカルティ・ディベロップメント（以下、「FD」とする）を全学的に推進している。

本センターの開設から6年、様々なFD活動をしてきたが、その大きな活動の一つとして、「日本大学 学生FD CHAmmiT」が挙げられる。歴史的な第一回目を引き継ぎ、今回は第二回目として平成26年12月21日に「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」を開催した。「日本大学 学生FD CHAmmiT」をわかりやすく言い換えれば「学生FDサミット 日本大学 ver.」であるが、全国の各大学が一大学に集合して大々的に行われる「学生FDサミット」とは毛色が違う。

まず、CHAmmiTとはサミットとチャットを掛け合わせた造語である。そしてFD、すなわち教育改善であるが、「日本大学 学生FD CHAmmiT」にはそのような「難しく堅苦しい話でも教員・職員・学生で気軽に話し合おう」というコンセプトが包括されている。次に、日本大学ならではの「学生FDサミット」が独自のものである特徴として「日本大学 学生FD CHAmmiT」は本学内のみで催される。本学内のみで行うことで、全国の大学が集まって行われる「学生FDサミット」よりも教員・職員・学生が近い距離で話をすることができ、内容の密度や情報共有もより濃いものになる。これは明らかに「学生FDサミット」よりも

*E-mail: setoyama.shizen@gmail.com

投稿：2015年9月30日 受理：2015年10月6日

優れている点であろう。

また、本学が抱える問題を解決する糸口としての役割もある。周知のとおり本学は日本最大級の大学であり、学生数に比例する多様な学部を抱えている。2016年4月には16学部・通信教育部が稼働し、その規模から分散型キャンパスと呼ばれる形態をとっている。多種多様に独立しているためにその問題点として、各学部間の連携が取りづらく、学生同士の交流も自学部以外では期待できないという点がある。これは本学が一丸となって教育改善活動をするにあたっての障壁である。

そこで、普段交流のない他学部の学生・教員・職員との意見交換をし、学部の垣根を越え、広く学生FD活動が認知・浸透されることを期待して、「日本大学 学生FD CHAmmiT」が登場することとなる。

学生参画、つまり学生の声を教職員に届けるという意味での“学生が変える日本大学”というテーマを基に第一回目「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」を開催し、その効力を確かなものにするため、“継続的”に「日本大学 学生FD CHAmmiT」を開催する必要がある、この度「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」が開催された。

「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」は第一回目同様に広く学生FD活動が認知・浸透されるという主目的とともに新たに“参加者が学生FDに興味を示し、一緒にやってみたくなるようなイベントにしよう”という企画運営上のテーマが付随された。継続的に開催することで「日本大学 学生FD CHAmmiT」乃至学生FDに様々な付加価値が自主創造されていくと同時に、教職協働・学生参画によるファカルティ・ディベロップメントが進んでいくことを期待する。

まずは今後、学生FD活動が発展することを期待し、「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」の全容と詳細について、以下に述べることとする。

2 CHAmmiTとは

本節では、学生FDとは一体どういうものなのかについての説明を述べた後、その学生FDを主眼に定められたイベントである「日本大学 学生FD CHAmmiT」（以下、CHAmmiT）についての概要を解説し、本稿の主題でもある「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」について全容及び前回との相違点といった点から述べるものである。

2-1 学生FDとは

本学では、FDを「自主創造の理念の下に日本大学を取り巻く外的諸要因をも分析して、学問領域単位（学科・専攻等）での教育プログラムを常に見直し、それを実行するため、教員が職員と協働し、学生の参画を得ながら組織的に取り組む諸活動」と定義しており、日本大学FD推進センターを中心として様々な活動が行われている。ここに学生の参画を得ながらと明示されていることから、本来は教職員が主体となって行うFD活動に学生が関わることはそもそも当然のように思われる。

しかし、日本ではFDに学生が関わることはおろか、欧米諸国と比較してFD自体が新しい存在であり、その必要性及び活動が各大学において浸透していたとは言いがたい状況であった。そうしたなかで、2008年より全大学に義務化されたことによってようやく陽の目を浴びることとなったFDではあるが、当初は義務化されたことにより行わなくてはならない「やらされ感の強いもの」となっていた¹。各大学がシラバス、授業アンケートといった活動を行い始めたが、それらは学修の主体者であるはずの学生に対する活動というよりも、義務的業務をこなす活動であったのだろう。このような状況のなかから出てきたのが、立命館大学教授（当時）である木野茂氏によって2007年に作られた学生FDという概念である。木野氏が

学生FDという語を使い始める以前からFDに学生が関わることがなかったわけではなく、岡山大学では2001年から学生参画型FDという名称でFDに学生が関与する活動が存在していた。この学生参画型FDと学生FDの違いは、活動領域や学生の構成要員等に大きく見られ、同一視することは難しく思われる。学生参画型FDは、大学側によって選出された学生がスタッフとなることによって組織が構成され、授業改善に特化した活動を主としている。一方で、学生FDとは木野氏により以下のように定義されている。「学生FDとは、授業や教育の改善に関心をもつ学生が、その改善のために学生自身が主体的に取り組む活動であり、大学側との連携を求めるものを指す。」このように、学生FDとは授業改善だけでなく、その周辺の活動をも定義に含んだ広い意味を持つ活動であり、またその構成は任意の学生となっている。このように広く活動を許容する定義となっていることから、その意味が随時拡張され、「学生による主体的活動全般」ⁱⁱとも受け取られている場面も最近では見受けられるものの、木野氏によれば「出発点は違うが、授業や教育の改善に取り組むようになった時点では、学生FD活動を始めたというべきである」ⁱⁱⁱとあるように、学生生活全般の主体的な活動ではなく、最終的には授業や教育の改善を主眼とした活動をしていることが学生FDであるとみなすことのできる条件の一つとなっているようである。

2-2 CHAmmitとは

こうした学生FDを日本大学でも普及させるべく企画されたのが、CHAmmitである。このイベントは、日本大学でも数少ない全学的なものであり、全学部から推薦・公募された教職員及び学生が一同に会し、FDや学生FDについてのレクチャーを受けた後に日本大学における教育や良い学修について話し合いをするといった趣旨のもと、第1回を2014年2月26日(水)に「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」と題して、また、第2回は2014年12月21日(日)に「日本大学 学生FD CHAmmit 2014」と題して開催された。第1回は各学部から1人ずつ選出された学生がコアメンバーとして運営を担い、また各学科に対し参加者1人を推薦するよう要請し、計131人が一堂に会して日本大学における学修について話し合いを行った。また、第2回では各学部から選出された学生の他に公募も同時に行い、第1回でのコアメンバーや参加者、掲示物等で興味をもって応募してきた学生などもコアメンバーとして運営を行い、また参加者も174人と大幅に増大した。

プログラムとしては第1回と第2回は大筋としては同様であり、最初に講堂にて簡単なレクチャー及び「赤青札」と呼ばれる会場内全体でのワークが行われ、その後場所を移して「しゃべり場」と呼ばれるワールド・カフェ形式での話し合いをし、再び講堂に集まり成果発表をするといったものである。第1回である「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」では、商学部教授の村田英治氏によるオープニングスピーチのあとに「共同企画」が行われた。これは、学外から講演者を招聘し、日本大学において唯一学生FD公認組織として活動している日本大学文理学部学生FDワーキンググループ(以下、文理学部学生FDWG)と共に行う企画である。上述した通り、CHAmmitの参加者は各学部から推薦されてきた学生であり、そのほとんどが学生FDという言葉を知らずに来ていることから、この企画におけるイベントでの役割としてまずは学生FDとは一体どういうものなのかを具体的に示す必要があった。内容としては、壇上での寸劇及び具体例を示した動画の上映が行われ、その後講演者である岡山大学教育開発センター准教授(当時)の天野憲樹氏と、文理学部学生FDWGリーダー(当時)の今宮加奈未氏がスライドを多用しながら学生FDの歴史や活動を行う上での注意点を述べた。その後、講堂から教室へ移動し、予め決められている6人程度のグループに分かれて「学生参画型企画」を行った。「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」では、各学部でまずは集まり、学部ならではの特色を洗い出す「学部ミーティング①」、学部混合で行う「ちゃみっとーく!」、そしてもう一度同じ学部で集まって話し合う「学部ミーティング②」が行われた。「ちゃみっとーく!」とは、KJ法を用いた問題発見型のワークで、学生FDサミットをはじめ、他の学生FD関連イベントでは「しゃべ

り場」と呼ばれているものとはほぼ同様である。この「学生参画型企画」終了後、そのまま芸術学部教授の原直久氏によるエンディングスピーチへと移り、その後懇親会も行われた。第2回では、FD推進センター長及び副学長である加藤直人氏によるオープニングスピーチの後、やはり講演者である立命館大学教授（当時）の木野茂氏と文理学部学生FDWGによる「共同企画」そして小グループでの話し合いを「学生参画型企画」にて行い、エンディングとなった。

このように第1回と第2回では、全体の流れとして（1）共同企画によるレクチャー（2）学生参画型企画による模擬体験の2つを柱としている。ほとんどの参加者が学部から推薦により派遣されていることから当然学生FDに対する認知度が低い状況が続く限りでは、この2つの柱は今後も続くものと思われる。しかし一方で、この2つの柱こそがCHAmmiTの特色でもあるように思われる。他大学で行われている学生FD関連のイベントでは、基本的に学生FDに興味のある学生が自ら参加申込をしてくる以上、なんらかの経路で既に学生FDに対する興味関心を持っており、学生FDとは一体どのようなものでどういった活動があるのかといったベーシックスタディーが省かれることが多々ある。CHAmmiTのように、学生FDを知らない学生が大半を占めるような大がかりな学生FDイベント自体がそもそも稀有であり、ベーシックスタディーのレクチャーから始まるということが、CHAmmiTの特徴の一つと言えよう。

2-3 CHAmmiT 2014 について

「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」は、平成26年12月21日（日）に日本大学法学部10号館にて開催され、学生126人、教員24人、職員24人の計174人の参加者と、40人の学生及び教職員スタッフが参加した。

第1回と第2回では2つの柱があると上述したが、中身は大きく異なっている。平成26年8月4日（月）から5日（火）まで日本大学軽井沢研修所で行われた学生コアメンバー合宿において、企画を考え始める前に全体の骨子を作成した。長い討論の末、「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」の骨子は「学生FDをやりたいくなるようにする」と決まり、全体の流れも大筋で合意がなされた。その後の学生スタッフミーティングを通じ、全体の企画の意味が（1）知る（2）考える（3）話し合う（4）まとめる（5）アウトプットという順序で進むことが決まり、また、合宿から意見が出ていた「表彰」が企画の一つとして入ることとなった。第1回では企画ありきの体当たりのな全体像だったものが、第2回ではまず骨子を決め、そのためにどのようなプログラムを組むかを考え、さらにそのプログラムに合った企画を考えていくという手順を踏み、一つのイベント全体の完成図という俯瞰から徐々に細部を詰めていくということとなった。一つのイベント全体の完成図、と書いたが、実のところ学生スタッフミーティングを重ねる中でCHAmmiTの前後にさらに各学部で参加者と学生スタッフが事前ミーティング及び事後ミーティングを開催しようという意見も出ていた。しかし、実際は意欲的な学部が自主的に行ったのみであり、CHAmmiTの企画の一つとして全学部的に行われることはなかった。

このように、プログラムの作成手順が第1回と第2回では異なっているが、第2回の特筆すべき点は、「学生参画型企画」にある。第1回ではまず「学部ミーティング①」で同じ学部で集まり、学部の特色や学部ならではの問題点をピックアップ及び共有した後に、「オール日大ミーティング」で「学部ならではの楽しい授業・実習」について全学部混合のグループで話し合うことで更に自学部の特徴を意識させ、その後「学部ミーティング②」でそれぞれの持ち帰りを共有・分析し発表を行うものであった。したがって、順序としては（1）各学部（2）全学部（3）各学部となっていた。

しかし、第2回ではこれの逆となった。すなわち、（1）全学部（2）各学部（3）全学部となったのである。内容としては、「オール日大ミーティング①」で「自学部の良い授業について話しあおう！」をテーマに、自学部の特色を引き出す自己分析作業とともに他学部を知る情報収集作業を同時に行った。そして、「学部ミーティング」では前の作業結果の報告及び共有をし、そこから見えてくる「自学部らしさ」を浮かび上が

らせ、それを模造紙にまとめあげる作業を行った。こうして可視化された「自学部らしさ」を、次の「オール日大ミーティング②」において発表した。発表といっても一方的かつ閉塞的なものではなく、ポスターセッションのように自由に見て回る形式にしたことから、学生自身も緊張すること無くリラックスした様子で発表し、聞いて回っていたように筆者は感じた。

第1回においては最終的に自学部での話し合いに持ち帰ることで、その後学部で継続する可能性が生まれてくる一方、自学部のまとめをごく少数に対してしか発表できないという狭小感があった。しかし、第2回では最終的に全学部に対して自由に発表できることから、それぞれの学生がのびのびと「自学部らしさ」について発表していた印象があったように感じた。

以上、2つの柱という共通のものがある一方で、プログラムの作成手順の違いや「学生参画型企画」の内容の違いについて述べた。2.2でも述べたが、参加者の大半が学生FDという言葉が初耳であるという状況が続く限りは、2つの柱は残り続けるであろうし、たった一日のうちに学生FDについて知識を得て、しかも自分なりに考えて発表までするというこれまでのCHAmmiTのやり方は変わらないのではと思われる。これは決して批判的な捉え方をしているわけではなく、むしろ日本大学という学生数最多を誇る巨大組織において学生FDを浸透させるためには、このやり方は最短手段であろうと思われる。まずは知ること、そしてロールプレイを通じて体験し、その楽しさを知ること。この楽しさこそがCHAmmiT以降にも学生FDに関わろうという気になる原動力となり得るのであり、その原動力を創りだすのはCHAmmiTにほかならないのである。

3 CHAmmiTにおける今後の課題と展望

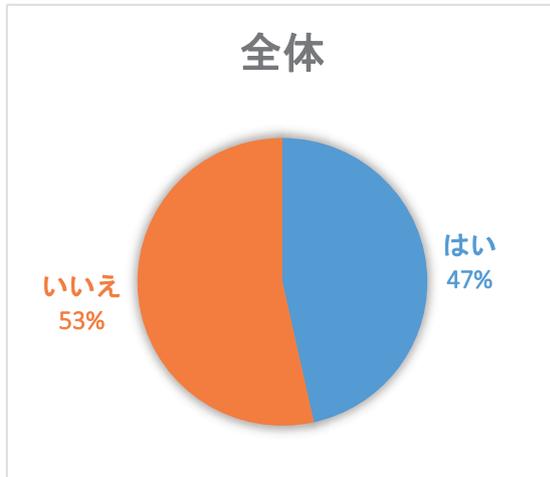
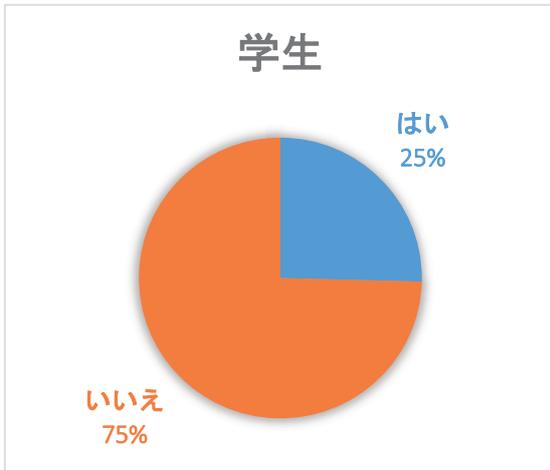
本節では、学生スタッフの視点から、「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」を終えて判明した課題と展望について、参加者アンケート結果や学生スタッフの意見を踏まえ述べる。

3-1 参加者アンケート結果から見た日本大学における「学生FD」の難点と利点

平成26年12月21日(日)、本学法学部において開催された「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」は、本学における全ての各学部等から学生136名・教員20名・職員24名、合計180名が参加し、学生・教員・職員三位一体となった体制での学生参画型FDを実現した。「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」よりも更に大規模なイベントとなり、終了後に実施された「参加者アンケート」は「学生企画を大幅に含んだ全学的なFD推進イベント」を参加者がどう受け止めたかを明瞭に示すものである。

そこで以下では、問1～13に渡って実施された「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014 参加者アンケート」より、筆者が個人的により重要であると判断した設問を振り返りつつ、「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」の今後の課題と展望を探っていききたい。

1. 今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？



学生

はい・・・31名(約25%)

いいえ・・・91名(約75%)

教職員

はい・・・49名(約98%)

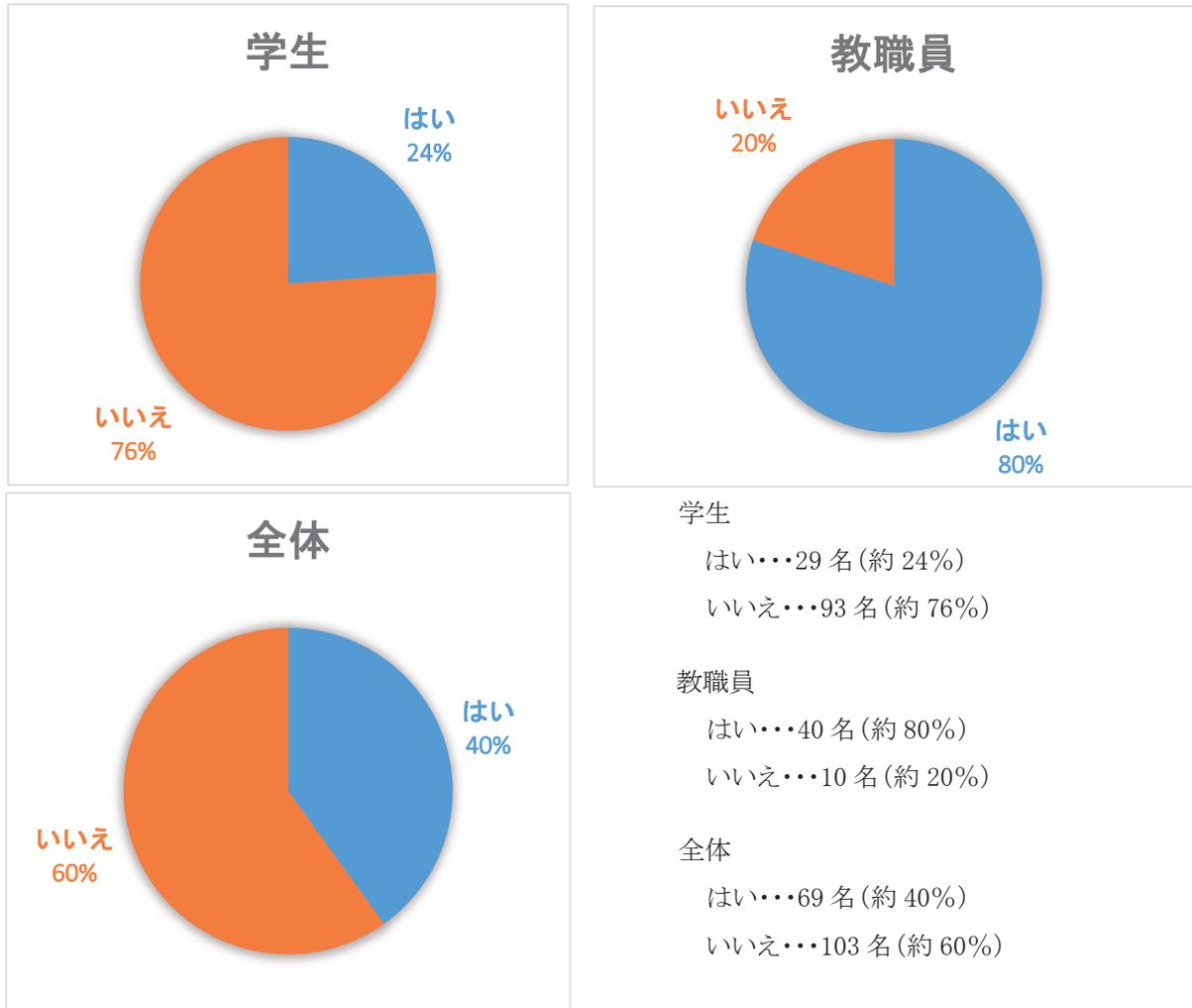
いいえ・・・1名(約2%)

全体

はい・・・80名(約47%)

いいえ・・・92名(約53%)

2. 今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？



上記のグラフは要するに、「FD」と「学生FD」の認知度を表しているが、全体的に前回よりも大幅に上昇しており、特に教職員の「学生FD」の認知度が顕著に数字に表れている。(前回の参加者アンケートでは教職員の「学生FD」について知っていましたか?の問いに対し、はいと答えたのは約65%だった。) 対して、学生の「FD」と「学生FD」の認知度は前回よりも若干、上昇はしたが、さほど大きな変化はなく、現状まだまだ認知度が低いことが判明した。

今回はFacebook等で広く「FD」や「学生FD」について周知することに努めたが、更に広く周知するためには直接のアプローチが必要であると考えます。周知するにも各学部でキャンパスが離れているが故に、周知しづらいという日本大学ならではの難点があり、情報発信にも工夫を重ねていくことが必要である。

3. 本日のイベントを通じて、学部に戻り、学生FDについて何か行動を起こしたいと思いませんか。

学生	CHAmmiT 2013	CHAmmiT 2014
1. 必ず何かしたい	10%	44%
2. 機会があればしたい	61%	39%
3. 学生FD組織があれば関わりたい	13%	16%
教職員	CHAmmiT 2013	CHAmmiT 2014
1. 必ず何かしたい	15%	46%
2. 機会があればしたい	50%	36%
3. 学生FD組織があれば関わりたい	15%	8%

今回のアンケートでは「1. 必ず何かしたい」、「2. 機会があればしたい」、「3. 学生FD組織があれば関わりたい」と答えた人が全体の約8割以上であった。前回のアンケートでも8割以上ではあるが、今回は学生・教員・職員が「1. 必ず何かしたい」と前回の数値を大きく上回る程、学生FD活動に興味を示し、非常に肯定的な回答をしたことが分かる。筆者は「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」に参加するにあたり、目的の一つであった「火種をまく」ということを意識において活動していたが、結果として確実に数値に反映されており、嬉しい限りである。

行動を起こしたいと回答していただいた人のコメントを紹介する。

学生

- ・「学生FDサークルを作る！」
- ・「まずは自分自身の授業態度を見直そうと思いました。」
- ・「他学部との比較により、逆に自学部をより深く知ることができました。」
- ・「学生FDについて広めたい！」

教職員

- ・「カリキュラムや履修についての生の意見があったので、機会があれば行動したい。」
- ・「これをきっかけに本学部でも学生FDを作ってもよい。」
- ・「話の中で出てきた学生の意見を自分の授業に生かしていきたい。」
- ・「本体のFDとどのようにリンクさせるのが重要」

日本大学は学部ごとにキャンパスを保有しており、各地に散らばっている日本最大級のマンモス校であるが故に、学部間での交流はほとんどない。おそらく、この先学生FD活動をするにあたり、日本大学で一つの学生FD組織を設立し、日常的に学生FD活動を行うというのは非常に困難であると考えられる。文理学部学生FDワーキンググループのように学部単位での学生FD組織を設立するというのが今のところ現実的である。

ただし、「学生FD」とは意図した活動をするから「学生FD」なのではないと筆者は考える。小さな気づき、無意識の行動が「学生FD」に繋がっていることもあるからである。「学生FD」が普段の学校生活の中で自然にできている未来もそう遠くはないはずである。是非、「学生FD」を理解し、自分1人でできることから始めてほしい。

7. 「学生FD」を継続的に進めていくには、何が必要であると思いますか。

コメントをいくつか紹介する。

学生

- ・「学部間の交流、及びそれを推進させる為の制度・行事等。」
- ・「学生の積極性はもちろんだが、大学や教員・職員の柔軟性が不可欠だと思う。」
- ・「口コミ・参加した人の感想などで多くの人が関心を持ってもらう必要があると思う。」
- ・「学生FDの活動をもっと宣伝する場を設けていくことだと思います。」
- ・「知名度をどんどん上げるのが重要なと思いました。」

教員

- ・「学生スタッフの熱意と教職員の手厚いサポート」
- ・「CHAmmiTの継続的開催と各学部でのきっかけ作り」
- ・「学部内でもこの様な場を増やせると良いと思います。」
- ・「学部・学科間での学生FDの実施がまず必要。」
- ・「学生に周知する機会をできるだけ多くつくる。」

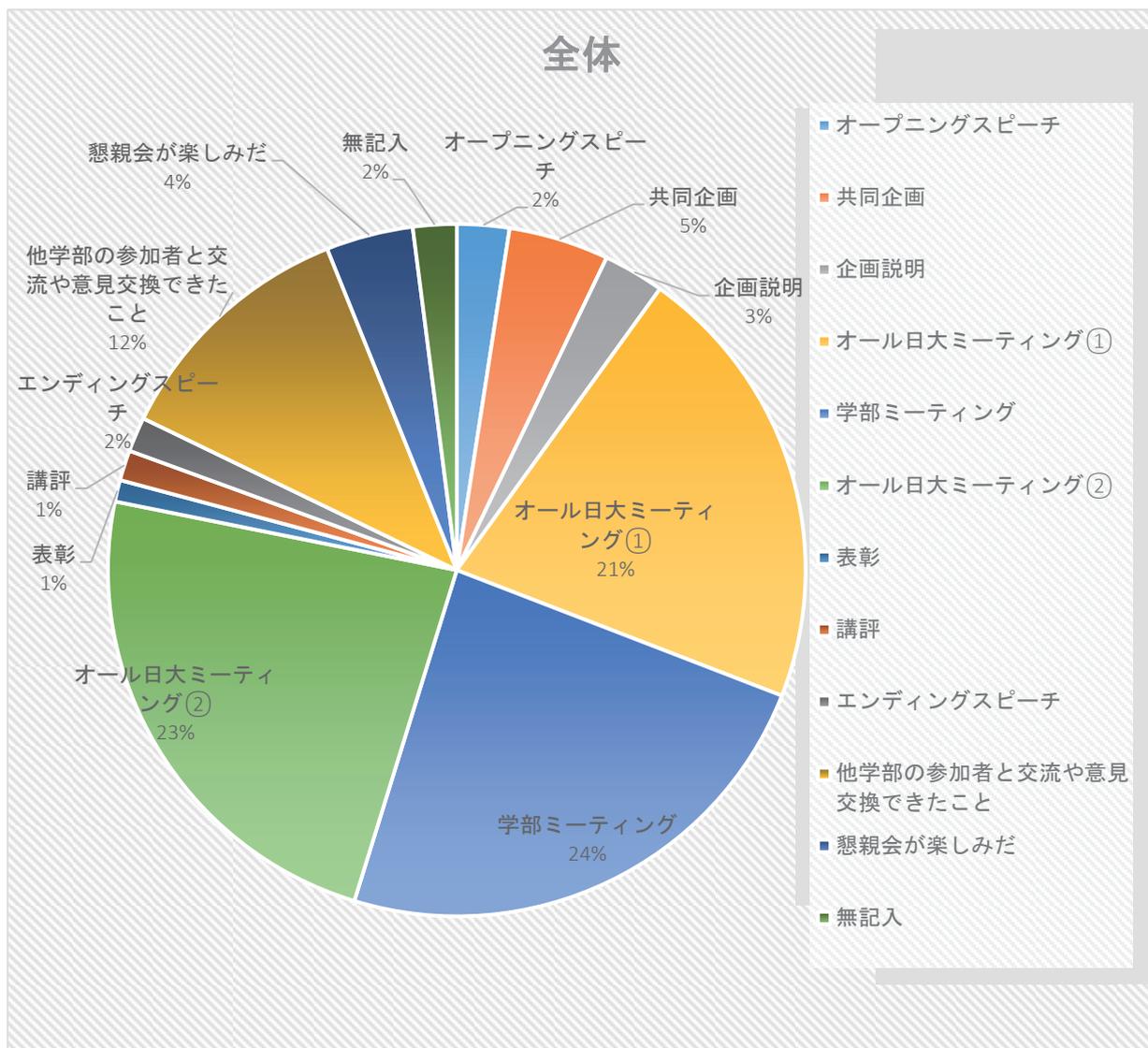
これらの学生・教員・職員からのコメントの中で、共通して多かった意見として、「周知する、宣伝する、認知度の向上」といったものがある。これは圧倒的に本学での「学生FD」の認知度の低さを表しており、参加者も学生FDの認知度の低さを感じているということである。筆者も認知度の低さを非常に感じており、前述のとおり、「日本大学 学生FD CHAmmiT」においては「火種をまく」という意識をもって参加しており、また、現段階では「学生FD」活動をして結果を得るというよりも、「学生FD」についてより多く知ってもらう、という段階だと考えている。

あくまで、ではあるが、「日本大学 学生FD CHAmmiT」は一種の広報活動であり、あわよくば「学生FD」に関心を持って活動を始めてくれる学生が現れるのを期待するというのが筆者のイメージである。よって、「学生FD」を継続的に進めていくにはやはり「日本大学 学生FD CHAmmiT」は効果的であり、毎年継続すべきであると考ええる。

しかし、「日本大学 学生FD CHAmmiT」は年に一度のイベントであり、「学生FD」を広く周知・理解してもらうためにはまた別のアプローチが必要であると考ええる。前述したが、各学部で学生FD組織を設立するという方法が一番効果的だと考える。それには教員・職員の協力が必要不可欠である。

「学生主体の活動」といえど、それは学生のみという意味ではなく、やはり、学生・教員・職員が三位一体とならなければ「学生FD」を継続・発展させていくのは困難であると考ええる。

10. 本日のイベントで有意義であったプログラムなどはどれですか。(複数回答可)



今回最も票を集めたのは「学部ミーティング (24%)」である。実は前回の参加者アンケートで最も票を集めたのは「オール日大ミーティング」であるが、前回はプログラムの趣旨として、「学部の垣根を越えた意見交換」を目的としていた。故に、他学部との交流ができる「オール日大ミーティング」に労力と時間をあてた。結果、確実にアンケートの数字に反映されており、目的を果たしたと言える。

では、今回の目的とは。「学部の垣根を越えた意見交換」はもちろん、今年は更に具体的な目的があった。学生FD活動を実際に行うとすれば、それは各学部に帰ってからのことである。よって、「他学部との意見交換」よりも「自学部での話し合いの場」に時間を割いた。狙いとしては、学生が自学部の教員・職員がいる場で授業改善について議論し、そのまま学生FD組織を設立するという流れまでを期待した。「鉄は熱いうちに打て」ということである。「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」の後、新たな学生FD組織が誕生したかは定かではないが、少なくともアンケート結果で最も票を集めることに成功したことで、今回も目的は達成できたのではないかと考える。

13. 「学生FD」または「日本大学 学生FD CHAmmiT」についてご意見などがありましたらご自由に記入してください。

コメントをいくつか紹介する。

学生

- ・授業について考えるのは初めての体験でした。
- ・学生FDの存在を知らない人が多いので、広報を強化することでより多くの日大生が参加、行動し、FD推進につながる。
- ・学生FDは学問の多様性という観点からも大切であり、また、学問の接触が増えるので大変歓迎すべきことです。是非とも、CHAmmiTが終わった後も続けて交流できるような仕組みが欲しいです。
- ・他学部の方とお話できたことは、とても新鮮に感じました。自分の学部はあまりにもかけ離れているところの授業でも、工夫の仕方は、取り入れられるものがあつたと良い経験になりました。
- ・来る前は心配でしたが、参加し、自分の学部・学科を振り返り、いい点を認識できたり、他学部のことも知ることができてよかったです。

教員

- ・学生が自らの学生生活の実態に目を向けるいい機会になると思います。
- ・いつか生産工学部でもCHAmmiTを。
- ・テーマ設定は難しいと感じる。具体的にした方が良いところと全体で議論できるバランスが取りやすいものを考える必要がある。
- ・全学部の学生が交流する場としてよい。

筆者の気づきとして、惜しいのは時間ではないかと考える。初めて「FD」「学生FD」に触れる学生について、いきなり理解して行動を起こして欲しいと望んでも、それはやはり、非常に困難であると考え。本学での「学生FD」の認知度もまだまだ低い。さらに、「日本大学 学生FD CHAmmiT」はまだ始まったばかりである。運営側にも「学生FD」について理解しているものも足りないといえる。そんな中での「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」は終わってしまったが、例えば筆者が次回も参加するならば、当日のプログラムを2日編成にしたい。「他学部との交流」・「自学部の授業改善についての議論」をたっぷり時間を使ってやってみたいと考える。そうすることにより、筆者の「日本大学 学生FD CHAmmiT」は広報活動の一種であるというイメージは変化すると考える。2日編成で開催した場合、広報活動のみに留まらず、実質的な各学部での学生FD組織の設立まで十分期待できそうな予感がする。是非、この「参加者アンケート」から見た筆者の反省と気づきを次年度以降の糧となることを願う。

3-2 表と裏、それぞれのCHAmmiT

本節では、「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013・2014」に携わった2年間でそれぞれの役割についての考えを述べ、今後の課題と展望としたい。

田仲 義典(日本大学経済学部3年・日本大学 学生FD CHAmmiT 2013～2014 副代表～代表として参加)

1. 第2回目となる「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」はどうでしたか？

イベント自体は成功したと確信している。しかし、いまだ目に見える形で成果、実績が出ていないため、継続していくことが重要であると考え。

2. 第1回目と第2回目に参加して、第1回目との違いや、日本大学の学生FDが少しでも進歩していると感じられましたか？また第1回目の時よりどのように進歩していると感じましたか？

違いは当日よりも企画運営の過程にあると感じる。また、学生FDへの目に見える実績がないために進歩の度合いは測れないが、当初の目的である認知度については地道に上がってきていると個人的に感じる。日本大学の学生FDはまだまだこれからだと考える。また、第1回目の企画運営はコアメンバー主体で行ったために他のメンバーとのモチベーションに差があったように感じる。第2回目の企画運営は全員企画を念頭に全員で企画を考えていったためにモチベーションの問題は1回目よりは改善された。しかし、進捗が遅れるなどの大きな弊害があった。効率を考えた場合、企画運営については少数精鋭で取り組み、仕事をメンバーに割り振ることが良いように感じる。モチベーションについては別の解決アプローチを考えた方が良かったと感じた。

3. 個人的に思う、次回も取り入れた方がよいと思う CHAmmit のプログラムがあれば教えてください。またその理由もお願いします。

オール日大ミーティング

理由：他学部との交流は CHAmmit ならではの強みであり、形は問わないが、他学部との交流はあった方がよいと考える。

4. CHAmmit を通じて、あなたが思う日本大学の「学生FD」を一言で。

「自主創造の卵」

5. 代表として苦勞した部分や、次回代表になる人達などへのアドバイスがあれば一言。

私が苦勞したことはメンバーのコンセンサスを得ること。全員企画などという無謀なことを進めたために足並みが揃うことに時間がかかりすぎた。コンセンサスを得るにはコミュニケーションをとる回数が重要。ある程度はトップダウンの方が、効率的だと感じた。また、コアメンバーや役割については、厳正に選抜した方が良かったと感じた。責任欠如や感情論が目立ったことに非常に遺憾に感じた。そのため一部のメンバーで仕事を抱え込みすぎたことやその処理に追われたことを含め、仲良しメンバーが良いとは言わないが、少なくとも責任感を持って建設的に議論ができ、企画運営ができる学生がコアメンバーを務めた方がよいと考える。役割を割り振る場合、その役割に対する相互の認識を一致させることは必須だと感じた。私の場合、うまくいかないことの方が多かったが、楽しめたことは事実である。今後、代表をやる人には気軽に楽しんで学生FDを謳歌してほしい。

瀬戸山 自然（日本大学通信教育部3年・日本大学 学生FD CHAmmit 2013～2014 資料作成担当代表～資料作成担当として参加）

1. 第2回目となる「日本大学 学生FD CHAmmit 2014」はどうでしたか？

当日はもちろん、その過程が第1回目とは比べものにならないくらい楽しかった。全てにおいてパワーアップしていたと思う。日本大学の「学生FD」の核心により近づけたような気がする。

2. 第1回目と第2回目に参加して、第1回目との違いや、日本大学の学生FDが少しでも進歩していると感じられましたか？また第1回目の時よりどのように進歩していると感じましたか？

学生スタッフ間のチームワークにおいては前回とは比較にならない程良かった。これは前回参加したスタ

ップが積極的に連携を取りやすくするために、スタッフ同志でよく食事をしたり、遊ぶことによって仲良くなることに努めたからだと考える。認知度の向上やスタッフの「学生FD」についての理解も向上しているところを見ると、徐々にではあるが、進歩していると言える。

3. 個人的に次回の CHAmmiT で取り入れたいプログラム、また資料作成担当が CHAmmiT に与える影響について個人的な考えを教えてください。

オール日大ミーティングは必要。理由としてはやはり他学部と交流できるという点でそれを目的として参加する学生が少なからずいるため。学部ミーティングは具体的に自分たちに何ができるかを議論したり、すぐ活動に繋げられる可能性があるため、その目的によっては必要である。

資料とは、CHAmmiT が終了した後も記録としてこの先も残っていくものである。次回の資料作成担当のみではなく、他大学が CHAmmiT の資料を参考にすることも十分考えられる。資料なくしては CHAmmiT はありえない。

4. CHAmmiT を通じて、あなたが思う日本大学の「学生FD」を一言で。

「オリジナリティ」

5. 資料作成担当を経験して苦労したこと、次回、資料作成担当になる人へのアドバイスを教えてください。

資料を作成することは一冊のアルバムを作るような感じである。スタッフ全員の集大成がそこには詰まっている。それを記録に残すという大変な作業ではあるが、やりがいと達成感を一番味わえるのではないだろうか。だが、悔しい思いも経験することになる。必死に作成しても修正を繰り返す、文句を言われることもある。心無い言葉を言われたこともあったが、資料作成担当になって後悔をしたことはない。日本大学の学生FD活動として後世にも残っていくとするなら、それは誇れるものを作成したことになる。次回、資料作成担当になる人へ、他では味わえない感動がそこにはあります。

4 CHAmmiT を通じて得たそれぞれの学生FDの在り方とは

本節では、学生スタッフの視点から「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」を通じて、本学における学生FDの在り方について、各々の考えを述べる。

4-1 田中 義典（日本大学経済学部3年・日本大学 学生FD CHAmmiT 2014 代表）

学生FDの役割としては学生の声を教員や職員に届けることが単純明快爽快である。しかし、学生の声を届けることが本当に教育改善につながっていくことになるのであろうかという疑問があることも否めない。ならば全学部が集まる CHAmmiT を単に交流の場としてだけではなく、競争の場として活用してみてもどうかという私見もある。具体的には、例えば、学部ごとに学生FD組織を創設し、全学の CHAmmiT を各学部の学生FDの1年間の成果を報告し合う場、評価をしあう場、改善点を話し合う場とし、毎年毎年繰り返していく案だ。この仕組みが確立されれば各学部の教員・職員・学生同士が自然と切磋琢磨していくのではないかと、ということだ。

学部学生FD組織の創設には本学本部による主導で枠組みを構築することが手っ取り早いですが、学部学生FD組織のメンバーのモチベーションが維持できないのではいかという懸念もある。反対に学生が自主的に学生FD組織を創設することを CHAmmiT で促し、全ての学部で学生FD組織が完成すること待つという

選択肢もあるが、これは時間の問題上いささか非現実的だ。やはり実現の可能性が高いのは本部主導で枠組みを作り、管理の補助をする案になる。そしてモチベーション問題の解決についてだが、CHAmmiTの企画内で学部同士の活動報告を評価し合い表彰をすることで、表彰された教職員にボーナス、学生に対しては金券等の目玉があればなおやる気がする。

さて、長い長い前置きとお金がほしいという欲望はさておき、私は「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」学生スタッフ副代表から「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」学生スタッフ代表を経験した。私は本学他学生よりも比較的に学生FDに足を踏み込んでいると思われる。しかし、学生FDの全容は依然掴めていない。思い返せば私は、学生FDよりも学生スタッフを取りまとめることに四苦八苦していたような気もする。企画に対する学生スタッフ同士の意見の対立も数知れずあったが、建設的な対案や議論は面白い。そんな中、気付かざるを得ないのは「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」と「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」の学生スタッフはもとより参加者の中にも大学教育に対して強い思いをもっている学生たちがたくさんいる、と言う点だ。この思いの受け皿としてCHAmmiTが発展していけばさらに日本大学は良くなっていくと思うし、学生FDの意義が強く確立されていくのではないかと考える。そのように考えると、仕組みとしての学生FD = CHAmmiTと、原動力としての学生FD = 学生の熱意、この二つが上手くマッチングすることが私なりの学生FDの在り方に対する見解なのだと気づかされる。

学生FDが教育改善に作用するにはまだまだ時期が早いため、まずは継続的にCHAmmiTの認知度を地道に浸透させていくことが重要だと考える。第一回目から関わっているために日本大学の学生FDが今後どのように進歩していくのかが気になるところであるが、今思うのはお世話になった大学本部職員の方々、FDWGの教授の方々や企画運営に携わった学生たちへの感謝の気持ちだ。

4-2 瀬戸山 自然（日本大学通信教育部3年・資料作成担当）

「学生FD」という言葉について、実は筆者もその本当の意味については理解していない。第1回目である「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」と今回の「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」に参加したが、活動を繰り返す度、議論をする度に筆者の中での「学生FD」について謎が深まっていく一方であった。

「学生が変える日本大学」をテーマに掲げ、授業改善について熱い議論を交わした第1回目「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」。筆者にとって初の「学生FD」活動であったが、見事に大成功を収めた。それ故に「学生FD」について理解したと見え、また、その活動の面白さを知り、第2回目である「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」に参加することを決心し、準備を進めていた。「学生FD」について更に理解を深めるため、京都産業大学で開催された「学生FDサミット 2014 夏」へ参加する機会があった。これが筆者の「学生FD」の概念を一変させたといっても過言ではない。

筆者にとってそれまでの「学生FD」活動とは、至極簡単に言ってしまうと、主に授業改善について学生・教員・職員が議論し、なんらかの問題解決への糸口を模索しそれを共有し周知する、というイメージである。しかし、「学生FDサミット 2014 夏」へ参加し、他大学の様々な「学生FD」の在り方について知った際、「学生FD」とはどうあるべきなのか、何を「学生FD」活動とし、何が「学生FD」活動ではないのかわからなくなってしまった。

各々が「学生FD」について異なる解釈をし、多種多様な「学生FD」活動がそこにはあった。日本大学の「学生FD」活動とは主に授業改善についてだが、それだけではないと知った時、「学生FD」の無限性と可能性に「面白い」と思わざるを得なかった。

結論、「学生FD」とは何かと問われても筆者はうまく答えることはできない。しかしそれが真理なのではないかと考える。多種多様、各々の「学生FD」の形態は様々であると。日本大学は授業改善に主に取り組んではいるが、この先一風変わった「日本大学 学生FD CHAmmiT」があってもそれもまた一興ではな

いだろうか。楽しみである。

4-3 安田 結城（日本大学文理学部4年・文理学部学生FDワーキンググループ代表）

本項は、日本大学文理学部学生FDワーキンググループ（以降、学生FDWG）代表（当時）として「日本大学 学生FD CHAmmiT 2014」（以降、CHAmmiT）の運営に携わり、企画から当日の運営までを通じて得た所感ならびに今後の学生FDの在り方についての個人的な見解を述べたものである。

「CHAmmiT」は前述したとおり、「日本大学全学部の学生・教員・職員が一堂に会し、FDや学生FDについて知識を深めるとともに、日本大学における教育の現状などについて三位一体となって話し合うことで、教育の質向上に寄与すること」を目的としたイベントであり、その目的は①FDならびに学生FDの認知、②三者の教育に対する有機的な意味での意見交換にあると言える。この目的に従うならば、地道な広報活動や講習会、前述した「しゃべり場」などを草の根的に継続することが効果的であるように思われ、「CHAmmiT」のように全学的な大規模で行い、かつ当日限りの人員でテーマを前準備もなく与えられる「しゃべり場」は一過性の効用しかもたず、その意味を再考する必要も生じるかもしれない。

しかし実際は、長年勤務することになる教員・職員と違い、学生は在学中の数年間という限られた時間の中でしか学生FDに携わることができず、その点では単にFD及び学生FDの認知、知識の深化ならびに有機的な意見交換をするという目的だけでなく、後輩への知識の伝承も目的となりうる。また、教育の受け手であり、数年間という限られた時間の中でしか携わることが出来ない以上、概念的な作業よりも実践的なものを学生は好む傾向にあると筆者は感じる。

こういった点から、日本大学で唯一の学生FD組織である学生FDWGにとっての「CHAmmiT」の本質は、①FDならびに学生FDの認知、②三者の教育に対する有機的な意味での意見交換、③学生FDに従事する学生からそうでない学生に対する学生FDに関する実践的作業に関する継承と言えよう。特にこの③の部分こそが、前回、そして今回の「CHAmmiT」で学生FDWGが寄与できたのではないかと思う部分であり、また今後の「CHAmmiT」でも重要となってくるポイントではないかと感じる。これは、「CHAmmiT」の本番当日だけでなく、ミーティングの段階で学生スタッフに対してまず学生FDとは何かを説明する際も同様であり、概念的な知識收受や「しゃべり場」だけでなく、「こういう取組をすればこのような成果を受けられる」という具体的かつ実現可能な事例の紹介や実践力をもつ企画の紹介を、学生が学生に対してするということが不可欠であるということである。

「各組織体における知の継承は、知識や技術などの知見については熟練者のナレッジ蓄積に重点がおかれ、形骸化しているケースが多い^{iv}とあるように、熟練者（長年携わることの出来る教員・職員）以外の学生による継承をもたないままに進める学生FDは、単に「知った」「喋った」で終わるだけであり、誰のため、何のために行っているかといった目的を失った形骸化した概念へとになってしまうことを、筆者は強く危惧している。今後の学生FDの在り方として、継承こそが鍵となるであろう。そのためにも、「CHAmmiT」は継続することに意味があり、その中でまた学生FDがその時々にあった形で、「CHAmmiT」を通じて受け継がれていくことを、筆者はただ望むだけである。

4-4 馬渡 惟史（日本大学医学部1年・資料作成担当副代表）

学生FDは定義がはっきりしておらず、どうやら大きく二種類に分けられるみたいです。私が教わったのは、講師陣（教員や教授など）の授業改善による教育の質の向上でした。これは今の学生が興味を持つような話題や例題をもとにした講義を提案または考案してみたり、講師の方々の講義形式を学生がよりわかりやすいように変えていくなどの、講義そのものを変えていくという目的のもと活動します。これとは違うもう一つの考えとして、学習環境（食堂や自習室など）を整備することによる教育の質の向上を目指す学生FD

というのものもあるらしいです。こちらは、学生の勉強設備や、勉強へのモチベーションにつながるものを改善していくことで、結果として教育の質の向上を目指すというものです。

私自身が考える学生FDは、初めに教えてもらったのが前者であることと、FDがFaculty Developmentの略であり、これがFaculty = (大学の全ての) 教員陣 [団], 教授陣であり、Development = 発達, 進歩, 開発と訳せることをもとに、やはり講師陣の授業改善を目指すものであってほしいと思います。それは私の通う医学部や薬学部、獣医学部などでは、専門の知識を学ぶことが非常に重要であるため、講義のわかりやすさや記憶への定着という点で教育の向上を目指せたらと思うからです。加えて、私の通う医学部には図書館や学食、自習室などを学生の要望に合わせて改善への提案をしてくれる生徒会の様な団体が別にあるからです。

私自身は以上の前提もあった上でこう考えますが、上記の二つの学生FDのうちのどちらが正しいのかはよくわかりませんし、ここでどちらが正しいという議論をするつもりもありません。FDの発足自体がまだ新しいものであり、ましてや学生FDの定義や存在はまだまだあいまいなものです。よって、学生FD団体の数だけ学生FDの定義があつていいと私は思います。時間をかけて学生FDを知ってもらい、いろんな方法を介してみんなで共通の「学生FD」を築きあげていけたらいいと思います。自分はそんなこれからの学生FDの前身として、第二回CHAmmiT学生スタッフとして関わったことをうれしく思います。

おわりに

結局、筆者は「学生FD」の在り方についてはわからないままであった。しかし、日本大学では「授業改善」に関しての活動を学生FD活動としている。広い意味で捉えようとすれば「学生FD」がなんなのかわからなくなってしまう。そんな時に気が付いた。自分自身、学生FD活動をして変化したことがある。学生FD活動に携わる以前は、学校の授業をただ聞いて板書をノートに記載するだけだったが、今では無意識に先生の方を注意深く観察しながら授業を聞いていた。無意識に先生がどのような工夫をして授業をしているかが気になっていたのだ。「授業改善」について取り組んでいるが故のことである。この無意識に授業に集中していることで以前よりは授業中の態度が改善されたと考えれば、これだけでも学生FD活動といえるのではないだろうか。とするならば、大掛かりなイベントを運営していただくが学生FD活動ではなく、参加者が学生FDについて理解し、無意識に授業のことや授業を行う教員に興味や関心をするだけでも学生FD活動だといえる。故に、今後も「日本大学 学生FD CHAmmiT」は開催するべきであり、「学生FD」について、参加者に理解させることで、無意識のうちに「授業改善」が成されていくはずである。

最後に、「日本大学 学生FD CHAmmiT」に2年間参加させていただいた中で出会った仲間と教員・職員の皆様には感謝しきれない。自分自身大きく成長させていただいたと実感している。「学生FD」は学生・教員・職員の三位一体で無ければ成されない。今後も日本大学としての特色と独自性を生かし、三位一体となり、学生FDの発展に期待したい。

注

- i 木野茂. 2015. 学生, 大学教育を問う●大学を変える, 学生が変わる 3. iii頁.
- ii 古田智久・今宮加奈未・安田結城. 2014. 日本大学FD研究 第3号. 24頁.
- iii 木野茂. 2015. 学生, 大学教育を問う●大学を変える, 学生が変わる 3. 10頁.
- iv 野中帝二・安部純一. 2013. 特技懇: 組織における知の継承 ―知の継承における五つの誤解. 268号. 34頁

「日本大学 学生FD CHAmiT 2014」学生スタッフ，教職員スタッフ

代 表：田 仲 義 典〔経済学部〕
副 代 表：八 釵 有 紀〔国際関係学部〕
共同企画担当代表：安 田 結 城〔文理学部学生FDWG代表〕
企画運営担当代表：石 堂 浩 暉〔文理学部学生FDWG〕
企画運営担当副代表：小 山 亮 祐〔生物資源科学部〕
資料作成担当代表：秋 山 悠 人〔法学部〕
資料作成担当副代表：馬 渡 惟 史〔医学部〕
資料作成担当：高 柳 真 由〔文理学部学生FDWG〕
資料作成担当：瀬戸山 自 然〔通信教育部〕
前 川 貴 恵〔文理学部学生FDWG〕
中 村 景二郎〔文理学部学生FDWG〕
佐 藤 海 将〔経済学部〕
瀬 良 兼 司〔商学部〕
長 井 友里恵〔商学部〕
小 泉 有 等〔芸術学部〕
森 谷 賢 太〔国際関係学部〕
福 田 真 由〔理工学部〕
新 井 洋 祐〔生産工学部〕
ラハマーン ラビブライス〔工学部〕
紺 野 昌 弘〔工学部〕
小 川 雅 希〔工学部〕
響 尾 洸 太〔工学部〕
福 井 はるか〔歯学部〕
鈴 木 昇 建〔松戸歯学部〕
石 井 綾 乃〔生物資源科学部〕
森 田 智 子〔薬学部〕
濱 田 潤〔通信教育部〕

教職員スタッフ：

河 相 安 彦〔全学FD委員会プログラムWG・松戸歯学部教授〕
村 井 秀 樹〔全学FD委員会プログラムWG・商学部教授〕
羽 入 敏 樹〔全学FD委員会プログラムWG・短期大学部船橋校舎教授〕
並 木 洋 明〔全学FD委員会プログラムWG・学務部教育推進課長〕
大 嶽 龍 一〔全学FD委員会プログラムWG・学務部教育推進課課長補佐〕
後 藤 裕 哉〔全学FD委員会プログラムWG・学務部教育推進課主任〕

平成 26 年 12 月 21 日現在